

慶應義塾大学  
教養研究センター設置科目

「生命の教養学」

2023 年度 講義記録

贈与

## 目次

まえがき		1
合理と不合理～ヒトとはどのような生き物か	小林佳世子	3
分かち合うこと・分かち合わないこと： 狩猟採集社会におけるシェアリング	丸山 淳子	5
オスとメスの間の繁殖をめぐる贈与	安部 淳	7
利益と贈与の西洋思想史	藤岡 俊博	10
言語からコトの捉え方を探る： Dativ（与え（られ）る格）の文法	田中 慎	11
文化的農業景観の保全に果たす贈与の役割： 境木（さかいぎ）に着目して	徳岡 良則	13
歓待の罫と贈与のモラル： 中国農村の日常生活の場面から	川瀬 由高	15
森林生態系における「贈与」： きのこ・植物・動物の相互作用	糟谷 大河	17
生命の贈与： アステカ人の供犠のコスモロジー	岩崎 賢	20
チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』	新井 潤美	21
命の贈与 ——極北先住民イヌイットの狩猟と食物分配	岸上 伸啓	22

2023 年度教養研究センター設置科目  
**「生命の教養学」 講義日程・テーマ一覧**

〔開講〕 春学期・金曜日・4時限目 〔場所〕 来往舎1F シンポジウムスペース

	講義日	講師 (敬称略)	所属・職位	テーマ
1	4月7日	石川 学	慶應義塾大学商学部准教授 (コーディネーター)	概要説明
2	4月14日	小林佳世子	南山大学経済学部准教授	合理と不合理 ～ヒトとはどのような生き物か
3	4月21日	丸山淳子	津田塾大学学芸学部教授	分かち合うこと・分かち合わないこと： 狩猟採集社会におけるシェアリング
4	4月28日	安部 淳	神奈川大学理学部 非常勤講師	オスとメスの間の繁殖をめぐる贈与
5	5月12日	藤岡俊博	東京大学大学院 総合文化研究科准教授	利益と贈与の西洋思想史
6	5月19日	田中 慎	慶應義塾大学文学部教授	言語からコトの捉え方を探る： Dativ (与え(られ)る格)の文法
7	5月26日	徳岡良則	愛媛大学社会共創学部 助教	文化的農業景観の保全に果たす贈与の 役割：境木(さかいぎ)に着目して
8	6月9日	川瀬由高	江戸川大学社会学部講師	歓待の罨と贈与のモラル： 中国農村の日常生活の場面から
9	6月16日	糟谷大河	慶應義塾大学経済学部 准教授	森林生態系における「贈与」： きのこ・植物・動物の相互作用
10	6月23日	岩崎 賢	神奈川大学外国語学部 准教授	生命の贈与： アステカ人の供犠のコスモロジー
11	6月30日	新井潤美	東京大学大学院 人文社会系研究科教授	チャールズ・ディケンズの 『大いなる遺産』
12	7月7日	岸上伸啓	国立民族学博物館教授 総合研究大学院大学教授	命の贈与 一極北先住民イヌイットの狩猟と 食物分配
13	7月14日	グループディスカッション、ふりかえり		
14	7月21日	総括・筆記試験		

(所属・職位は開講時のもの)

## まえがき

本冊子は、慶應義塾大学教養研究センター設置科目「生命の教養学」（2023年度）の講義記録です。この科目は、自然科学および人文・社会科学の各分野において、それぞれ異なる角度から問われ続けている「生命」という大きな主題を結節点に、いわゆる「文系」「理系」の垣根を越えて広がる学際的な知の現場を提供すべく企画されたオムニバス形式の授業です。年度ごとに定められたテーマに即して、塾内外から招いた11名の専門家による連続講義が行われます。

2023年度のテーマは「贈与」でした。「贈与」は近年、とりわけ人文・社会科学系の分野でホットなトピックとなっており、人間の社会性の基礎、それも、あまりに根源的であるがゆえに忘却されがちな基礎として、再注目の必要性が活発に議論されています。一方で、よく知られるとおり、「贈与」的な振舞いは人間の専売特許ではなく、鳥類や哺乳類をはじめとした動植物や、さらには細胞のレベルなど、生命の様々な位相に存在し、その存続と発展を可能にする鍵として機能しています。「贈与」が示唆するのは、人間を含む諸々の生命が、利己主義的なエコノミーに還元されない、対他関係への指向を本質的に宿している事実です。文理の境界を越えて、この主題をめぐる幅広い学問分野の知見を結集することは、人間中心主義と利己主義を暗黙裡に自明とした現代人の思考パラダイムを相対化し、多様な生命の共生を旨とする次世代の思考の道筋を開拓するための重要な一助となるはずです。

今回、このような問題意識のもとで、行動経済学、アフリカ地域研究、進化生物学、西洋思想史、対照言語学、生物資源保全学、中国研究、菌学、ラテンアメリカ地域研究、英文学、北方文化研究という、まさしく多岐にわたる分野の専門家にお話をいただきました。60分間の講義はすべて、熱のこもった濃密なもので、続く30分間の質疑応答では、学生からの質問が途切れることはありませんでした。各分野を代表する研究者たちの知見を全体を通じて総合するという、「贈与の教養学」の類い稀な機会を得られたことと確信する次第です。本講義記録はその充実をかたちに残すことをねらいとしています。

末筆ながら、多忙をきわめる学期中に、貴重な時間を割いて本講義のためにご尽力ください、講義記録の作成にもお力添えをくださった講師の先生方に、深く感謝申し上げます。受講者たちがこのたびの学びを、各人それぞれの仕方で活かしていくことを願ってやみません。

2023年11月

石川 学

「生命の教養学」2023年度企画委員

有川 智己（経済学部 教授／生物学・系統分類学）  
石川 学（委員長：商学部 准教授／フランス文学・思想）  
川上 了史（理工学部 専任講師／生物分子科学・生体機能化学）  
谷口 尚子（システムデザイン・マネジメント研究科 教授／計量政治学）  
西尾 宇広（文学部 准教授／ドイツ文学）  
宮本 万里（商学部 准教授／政治人類学・南アジア地域研究）  
山下 一夫（理工学部 教授／中国文学・思想）

（五十音順、職位は当時）

ティーチング・アシスタント

原 詩風（商学部2年）

— 2023年4月14日

## 合理と不合理～ヒトとはどのような生き物か

南山大学経済学部

小林 佳世子／行動経済学・ゲーム理論・法と経済学

本講義では、「見知らぬ他者への分かち合い（贈与）」という利他行動がなぜ起こるのかという問いを、行動経済学や社会心理学、文化人類学や認知科学、動物行動学や脳神経科学といった文理の枠を超えた多数の実験を通じて考えました。

具体的には、まず「最後通牒ゲーム」や「独裁者ゲーム」という、ゲーム理論において非常によく知られた分配の状況を取り上げ、いわゆる合理性から考えれば独り占めをするはずの状況で、見知らぬ他者に分かち合おうとする利他行動が、世界のあらゆる地域・文化で繰り返し観察されることを文化人類学的な実験データから確認をしました。

その上で、こうした不合理にもみえる利他行動がなぜ起こるのか、もっともよく行われている大学生を対象とした実験室実験のみならず、赤ちゃん研究や動物での行動研究、さらには脳の研究なども含む多数の実験のデータを積み上げる形で、ヒトの意思決定の根底にあるものを探り、そこにある合理性とは何かを考えることを本講義の主目的としました。

結論としては、ヒトは進化の中の生存と繁殖の可能性を上げるという意味での合理性を持つことを主張しました。それは、私が「適応合理性」と呼ぶものでもあります（小林, 2021）。社会の一員として生きるように進化したヒトという生き物は、社会における「裏切り者」とみられることを強く恐れ、他者からの目や評判を強く気にかけるようになりました。そうした心的メカニズムが、分かち合いが期待される場面における、(いわゆる合理性だけから考えれば不必要な)「贈与」という利他行動が起きる一つの要因である可能性を議論しました。

また、周囲の他者からの評判を気にかけてしまう背景としての、「裏切り者を見つける力」や「裏切り者を覚える力」、さらに「裏切り者を広める力（ゴシップ）」などについても議論しました。社会の裏切り者に対しては、ヒトは強い怒りや嫌悪といったネガティブな感情を抱き、その感情を直接の原動力として、たとえ自らが損をしてでもそうした「悪者たち」に罰を与えたいという強い欲求を持っているようです（「利他罰」）。また罰を与えている時には、脳の報酬系が関与し、自らの正義に反する者を罰することそれ自体に、「快感や喜び」を覚えている可能性も強く示唆されています。またそうした罰に伴う快感は、何の利害関係のないはずの第三者においてもみられることも議論し

ました。

こうした「罰」行動は、社会の中の裏切り者を排除するという重要な役割を果たしてきたことは間違いがないだろうと考えられてはいますが、一方で、ネット・バッシングを始め、いじめや民族問題、さらには戦争のような様々な社会の問題にも関り、今日の社会の分断を引き起こす心的メカニズムの一つでもある可能性にも触れました。

講義後に質問の時間を30分弱ほど残しましたが、最後までたくさんの方が上がり、学生さんの熱心さには頭が下がりました。終了後も個別に質問を受ける形をとりましたが、合計で優に1時間を超える質問が途絶えることなく続き、また終了後に送っていただいたミニレポートもびっしりと書き込まれたものばかりでした。

頂いた質問も、実験にかかることや多様性について、さらには市場との関係についてなどとてもレベルの高いものばかりで、熱心に講義を聴いてくれたばかりでなく、それぞれが一つ一つの問題を充分に受け取って考えてくれていることがよく伝わってきました。

たった一コマの講義でしたが、こうした熱心な学生さんたちの存在のおかげで、私にとってもとても刺激的な時間となりました。この場をお借りして、コーディネーターの先生方を始め様々にサポートして下さった事務職員の皆様、さらに当日参加してくれた学生の皆さんなどすべての関係者の皆様に、心から御礼を申し上げます。

— 2023年4月21日

## 分かち合うこと・分かち合わないこと： 狩猟採集社会におけるシェアリング

津田塾大学学芸学部

丸山 淳子／アフリカ地域研究・文化人類学

わたしたちの毎日は、モノのやりとりであふれている。今朝の朝ごはんも、食べ物をすべて自分ひとりで作ったわけではなく、なんらかのかたちで、誰かから与えられ、手に入れていたはずだし、また逆に、自身が、誰かへの与え手になることもある。受講生の多くは、そういう日常のモノのやりとりのなかでの気づきや疑問、違和感と結び付けながら、あるいは、改めて日常を見直しながら、この講義に参加してくれた。

受講生の日常においても、今回の講義で取り上げた南部アフリカの狩猟採集民サンの社会でも、モノのやりとりはさかんだ。ただ、その「やりとり」の様態は、それぞれに独自性がある。サンあるいはブッシュマンとして知られる人々は、ごく最近まで、遊動的な狩猟採集生活を営んできた人々で、彼らが狩猟採集によって得られた食物を、家族の範囲をこえて分かち合うことは「シェアリング」や「食物分配」の名で、多くの研究者の関心を集めてきた。しかし近年のサン社会では、開発政策の影響下で、定住化や賃金労働への移行、市場経済との接続が急速に進んでいる。このようななかで、シェアリングが、どのように実践されている／ないのかを中心に、講義を進めた。

わたしが、長年にわたってフィールドワークを続けているボツワナのセントラル・カラハリ地域では、サンの大半が、インフラの整った開発拠点に集住・定住することが推奨されている。こうしたなかでも、シェアリングは実践されており、食べ物の分かち合いが家族のなかだけにとどめられることはない。しかし、開発拠点の人口密度は高く、居住用プロットが居住者の社会関係とは無関係に機械的に割り振られたために、近隣に住むことになった人々のあいだで、分かち合わない関係も生まれ始めている。一方で、この状況に「疲れた」人々は、あえて開発拠点を離れて、そこから数キロメートル離れた原野のなかに、複数の家族が共住するインフォーマルな住まいをつくり、そこで狩猟採集も行いながら、さかんにシェアリングを実践している。

サンのシェアリングは、余剰物に対してなされるものではない。たとえば採集された野生スイカは、採集から戻るとやいなや、共住者みなに分けられる。採集に一緒に行った人にも、行かなかった人にも分けられ、労働への貢献度とは無関係である。いったん分けられたスイカは、次は、スイカを調理したい人に乞われて、その手にわたるが、調理が終わると、また共住者や訪問者にも分けられる。同じスイカが同じメンバーのなかで



行ったり来たりすることもあり、ここで目指されていることが、モノの入手の効率性ではなく、相互性や対等性であることがわかる。

さらにシェアリングの詳細を見ていくと、それがあらかじめ決められた「ルール」に従って実践されているものではないことが明らかになる。一回一回のシェアリングは、互いのおかれた状況、とりまく社会関係、それぞれの気持ちなどをふまえて、その都度交渉されるものである。したがって、互いの期待が一致し、シェアリングがなされることもあれば、何らかの不一致によってシェアリングに至らないこともある。またそのやりとりで重視されるのは「与え手」と「受け手」の自発性である。たとえば「受け手」は、肉のある家を訪問し、そこに居続けることで、直接的な要求はせずに「与え手」の自発性を引き出そうとする。一方で「与え手」も、あえてそっけない態度をとり、肉の入った皿を、「与え手」と「受け手」の中間地点に置くことで、「受け手」の自発的な行動を待つ。こうしたやり方には、「ルール」のもつ効率の良さや利益/正解追求のやりやすさはなく、むしろ「めんどくささ」がつきまとう。しかし、それは目の前の相手との関係を築きながら、同時にそれにコントロールされない「自由」を追求するものでもある。受講生の日常においてあたりまえになっている市場交換が、モノのやりとりのなかでも明確な「ルール」に従う顕著な例である一方で、今日も続くサン社会のシェアリングは「ルール」化を極力避けることによって成立しているモノのやりとりと位置付けられる。

受講後に、受講生が書いたレポートには、サン社会で働かない人や怠け者が、それにもかかわらず、与えられることに対して、自身に「ずるい」「不公平」「良くない」という感情がわくことに気づき、それについて書かれたものが多く見られた。なぜ、私たちはそう思い、それを表明することをあまりためらわないのだろうか。サンの人々も、そんな風には言わないだけで、同じように感じているのだろうか、それともまったく別の理解の仕方や感情の動きがあるのだろうか。なにかを与えられることが、なんらかの「貢献への見返り」であるべきで、「ただ乗り」は許されるべきではないという私たちの「あたりまえ」が、どのようにして「あたりまえ」になってきたのか、そうではない「あたりまえ」があるとしたら、どのようなものなのか。シェアリングをめぐって、考えるべきことは、まだいろいろあることを、私自身改めて気づかされた機会になった。

— 2023年4月28日

## オスとメスの間の繁殖をめぐる贈与

神奈川大学理学部

安部 淳／進化生物学

本講義では、生物のオスとメスの間で見られる贈与（ギフト）に焦点を当て、進化生物学の視点から考察することを目的とした。ここでは、精子、遺伝子、獲物、栄養、毒、なわばり、巣など、オスからメスに与えるものすべてをギフトとして扱った。

まず、今回のテーマでもある「オスとメス」の違いについて考えた。受講者にその違いを列挙してもらい、特にその中でも根本的な違いについて考えてもらった。生殖器、体格、行動など、様々な違いが考えられるが、生物学的には小さな配偶子（精子）を作る個体をオス、大きな配偶子（卵）を作る個体をメスと呼ぶ。この配偶子の数の違いにより、オスの間でメスをめぐる競争が生じ、オスとメスの間で見られる様々な違いが現れる。オスはメスに交尾相手として選んでもらうため、精子以外にもギフトを提供する可能性があると考えられる。

講義の中では、メスを惹きつけるためにオスが作るアズマヤドリのあずまやや、様々な昆虫類で交尾の前後でオスからメスへ贈る獲物や栄養物質について解説した。メスが複数回交尾を受け入れる種では、複数のオスの精子が受精をめぐる競争する精子競争が生じるため、ギフトをめぐるやり取りはさらに複雑になる。キイロショウジョウバエでは、交尾の際にオスからメスに贈られるある種のタンパク質が、メスの再交尾を抑制し産卵を早めるが、メスにとっては寿命や生涯の産卵数を減少させる効果をもたらす。このタンパク質は、オスにとってはライバルオスよりも自身の精子が優先的に受精させることができ有利にはたらくが、受け手のメスにとっては望ましくない、いわば毒のプレゼントである。このように、進化は双方の利益のためでなく、利己的な行動を進化させる。世間では進化が「種の繁栄」や「種の保存」のために起こるといった間違った考え方が流布しているが、それは間違いであり個体にとって有利な性質や行動が進化することを強調した。

我々が数理的に解析した、精子の授受を介したオスとメスの繁殖戦略の共進化に関する理論モデルについても解説した。このモデルは精子の授受だけでなく、ギフトの量を調節する贈り手とギフトをもらう相手の数を調節する受け手がそれぞれの利益のために振る舞う場合について、あらゆるギフトのやり取りに適用できる。さらにこのモデルは、メスがペニスを持つチャタテムシの仲間にも応用することができる。このチャタテムシ

は、栄養が乏しい洞窟の中に生息するが、オスは交尾の際に精子と一緒に栄養物質を含めた精包をメスに贈るため、メスは交尾に積極的になる。さらに、メスが精包を同時に消化するためにスロットを2つ持つように進化したと考えられる。シミュレーションモデルでは、メスが2つのスロットを持つとより多くの精包を受け入れることができるが、メス間の交尾をめぐる競争が激化し、このことがメスのペニスの進化に起因していることが示唆された。さらに、興味深いことに、メスが2つのスロットを持つと、メスが生涯産める子の数が減少することも予測された。この例でも、個体の利益を追求した進化が起こると、種や集団全体にとっては望ましくない結果がもたらされることが示されている。

質疑応答では、進化生物学の概念に関する率直な疑問から、理論を深掘した発展的な質問まで、様々な疑問を得ることができた。活発に手が挙がることには驚かされた。いずれもそれぞれの学生の知識や専門分野を駆使して考えたことがわかる質問ばかりであり、私としても有意義な議論となった。ミニレポートからも、今回の議題に対し学生がそれぞれ考察を巡らせたことを伺うことができた。私が十分に説明できなかった点についても、うまく補って理解してもらえた跡が伺え、学生の理解力や洞察力に助けられた。

質疑やミニレポートから得られた反応をまとめると、進化生物学で考えるギフトと一般や他分野で扱う贈与のとらえ方の違いが顕著に表れたと思う。進化生物学では、ギフトを生産することで被るコストに対し、ギフトを贈ることによるベネフィット（見返り）が大きいときに、ギフトが進化すると考える。これに対し、人間社会では見返りを求めず、社会全体を安定化させるための贈与もあるらしい。すべての行動をコストとベネフィットの関係で片付けようとする私の考えは、進化生物学的な考え方に凝り固まっているのかもしれない。ただ、人間社会の贈与を進化生物学的にとらえるならば、贈与による直接的なベネフィットがなかったとしても、評判や地位を得ることによる間接的な効果の可能性を考えたい。さらに、認知や頭脳が発達したヒトの行動は複雑であり、単純には自然選択の考えが応用し難い場合もあることは、質疑応答の中でも議論した。

今回のテーマは贈与であったが、贈与を通じて進化生物学一般を教授できたのも私としては意義深い。特に、世間では「進化は種の繁栄や種の保存のために起こる」という考え方がまかり通っているが、それを正すことができた。もちろん、進化生物学からの視点を伝えただけに過ぎないが、受講者に新たな観点を提供できたのではないかと思う。実際、質疑やミニレポートでは、キイロショウジョウバエのオスが自身の利益のためにメスに毒をプレゼントする話や、トリカエチャタテのメスが自身の望みを満たすためにスロットを2つ進化することによって生涯産卵数が減少してしまう話は反響が大きかった。

今回は「生命の教養学」の1回分を僭越ながら担当させていただいた。私にとって、様々な専攻に渡る熱心な学生たちと触れ合えたことは、自身の専門や研究を見つめ直す上で、重要な経験となったことは間違いない。一方、生物学や進化学に馴染みの少ない学生にとっては、理解が難解な部分もあったかもしれない。しかし、このようなオムニ

バス形式での講義では、進化生物学的内容を正確に理解してもらうことよりも、「贈与」というテーマに対し新たな視点から考える機会を提供することのほうが重要であるかもしれない。今回の1回がそのための一助となれば幸いである。

## 利益と贈与の西洋思想史

東京大学大学院総合文化研究科

藤岡 俊博／フランス哲学・ヨーロッパ思想史

本講義では、「利益と贈与の西洋思想史」というタイトルのもと、「利益 (interest)」の概念の生成と歴史的展開を、哲学・思想にまつわるいくつかのトピックを取り上げながらたどった。「ひとは自分の利益を最大にし、不利益を最小にするように行動する」という人間行動の動因をめぐる見解は、功利主義や精神分析、さらには人間を「ホモ・エコノミクス」としてモデル化する経済学などを通じて、さまざまな仕方で繰り返し主題化されてきた。本講義は、こうした考え方の土台となる「利益」の概念の生成過程を、ラテン語の *interesse* のローマ法的用法にさかのぼりつつ、キリスト教的世界における徴利禁止の経緯も交えながら概観した。講義後半では、マキャヴェリやグイッチャルディーニに代表される16世紀イタリアの現実主義思想、ローアン公アンリがその一翼を担った17世紀の「利益」概念の隆盛、そしてラ・ロシュフコーやニコルにおける「利益」と「自己愛」の接近といったテーマを扱った。人間の弱さの直視を特徴とするジャンセニズムの系譜に位置するニコルによれば、人間は心の奥に潜む怪物としての自己愛に囚われた存在である。しかし、ニコルは同時に、賢明な自己愛であれば良い社会をつくることは可能であるとし、自己愛とキリスト教的な慈愛は、原理上は異なっているものの、同じ結果をもたらすことができると主張する。近年、こうしたジャンセニズムの議論が近代経済学に与えた影響については広く注目が集まっているが（詳しくは米田昇平『経済学の起源』京都大学学術出版会、2016年を参照）、本講義でも同様の観点から、自己愛による自律的な調整機能とスミスの「見えざる手」の議論との関連を述べて講義全体の結論とした。

講義後には、利益の定義不可能性や、シャルルマーニュによる徴利禁止、ニコルの議論などをめぐって、さまざまな角度から質問をいただいた。多くの受講生にとって哲学や思想史の話はほとんど馴染みがなかったはずで、どのくらい興味をもって聴いてもらえるのか不安な部分もあったが、講義後のミニレポートを通じて、受講生の一人ひとりが自分の関心に引きつけて講義を理解しようと努めてくれたことがわかり、講師にとって嬉しい経験であった。受講生のみなさんはもとより、コーディネーターを務めてくださった石川学先生、教養研究センターの方々に感謝を申し上げたい。

## 言語からコトの捉え方を探る： Dativ（与え（られ）る格）の文法

慶應義塾大学文学部

田中 慎／言語学・ドイツ語学・機能統語論

### 授業内容

「贈与」という本講義の全体テーマについて言語研究の立場からアプローチを行った。その際、「与えられる」というコトガラの言語における表れについて、講義担当者の専門であるドイツ語の Dativ（与格）を通して言語のしくみの一端を紹介した。また、日本語や英語などにおいて「与えられる格」がどのように表現されているかについての対照、観察を行うことにより、言語の個別性と普遍性を浮き彫りにする試みを行った。授業では主に以下の二つの現象を扱った。

- ・ 感覚、感情の受け手としての与格

ドイツ語の与格は、実際にモノを受け取るヒト (*Ich gab dem Mädchen eine Puppe.* (私はその女の子に人形をあげた) の *dem Mädchen* (その女の子) など) を表すほかに、(1) で示されているように感覚の受け手を表す。

- (1) *Mir ist kalt.* 私は寒い。／ *I am cold. /It's cold.*

to me is cold

(1) の文で「寒い」という感覚の受け手がドイツ語では与格で表されている。同様に「感情の受け手」も与格で表される。

- (2) *Mir gefällt die Musik.* 私はこの音楽が好きです。／ *I like the music.*

to me 気に入る the music

英語では、格が大幅に削減された結果、感情、感覚の受け手は主格主語で表されるのに対し、ドイツ語、日本語では、感情の対象 ((2) では *die Musik* (その音楽)) が主格で表れる。授業ではこの現象が持つ意味を考察した。

- ・ 「やり・もらい」とドイツ語の与格

日本語では、「授与」に関する動詞は、(特に話し言葉で) 基本的に、その「授与」が話し手に向かっているのか、話し手から遠ざかっているかによって、「～あげる」と「～くれる」を使いわける。

- (3) 私はその女の子に人形をあげた。／その女の子は私に人形をくれた。

この現象は授与関係を超えて、多くの場合一般的に行為の方向性が、これらの授与動詞から派生した補助動詞 (～してあげる、～してくれる) を用いて表される。

(4) 私はその女の子に英語を教えてあげた。／私に英語を教えてくれた。

この、「行為がどこに向かっているか」は、ドイツ語では（部分的には英語でも）与格によって表される。

(5) *Ich gab dem Mädchen eine Puppe.* / *Das Mädchen gab mir eine Puppe.*

(6) *Er kaufte mir ein Buch.* / *Ich kaufte mir ein Buch.*

he bought me a book      I bought me a book.

このことは、一般的にコトガラの方角性というべきものに拡大される。例えば (7) のような「コトガラから生じる感情、気持ち」は、日本語では迷惑の受身と呼ばれる構文で表されることがあるが、類似した意味（ある事象によって受け手がなんらかの感情的ダメージを受けること）はドイツ語では与格で表される。

(7) 私は（飼っていた）犬に死なれた。

(8) *Mir ist mein Hund gestorben.*

to me is my dog      died

このように、授業ではドイツ語で受け手の格を表す与格によって実現される細かい言語のニュアンスというべきものが、日本語でも違う形で観察されることを概観した。

さらに、授業内では、ドイツ語、日本語、英語の対照を、近年目覚ましい発展を見せている AI による自動翻訳 (deepL) のデモを通して確認した。AI による言語「創出」は、上で述べた「文法の原理」とは関係ない形で、大量の言語データ（データという言葉も Dativ と同語源のラテン語の「与えられたもの」(データ) から派生したものであるが) に基づいて行われるが、本講義では、AI による言語処理では（今のところ）再現されない見えない文法のダイナミズムというべきものがあることを確認した。

### 講義受講者の感想を受けて

さまざまな分野から参加した受講者の授業に対する感想は担当者にとって非常に刺激的なものであった。「言語」というのは、具体的には、さまざまな言語圏の文化や社会制度を反映しているという意味で、いわゆる「文系」の研究対象と見なされることが多いが、人間の種として言語発達や言語習得等を考慮すると純粋な自然現象であり、自然科学的な記述の対象となるものである。本講義でも、言語の個別性と普遍性を扱いながら、特に「自然科学としての言語学」という側面を強調しようという試みを行うつもりであったが、具体的な言語現象（与格）を導入し、その機微を説明しているうちに、やはり文化とは切り離せない言語の側面に注目が集まりすぎた感があった。今後機会があれば、この点を考慮して行いたいと考えている。一方で、受講者、講義者ともにさまざまな専門の人間が集まり、活発な質疑も行われているこの本講義は、文系、理系を問わない新しい学問研究の発展可能性が感じられるものであり、非常に意義の大きいものであるという感想を持った。

## 文化的農業景観の保全に果たす贈与の役割： 境木（さかいぎ）に着目して

愛媛大学社会共創学部  
徳岡 良則／植物生態学

### 〔講義の概要〕

地域の人々の生活や生業、地域の風土により形成された景観地のことを文化的景観という。文化的景観の歴史を理解することは、地域のアイデンティティや価値の付加につながり、さらに将来の景観管理にも役立つと言われている。文化的景観の歴史を考える際には、景観を形作る様々な要素の背景理解が重要となる。例えば、農業景観の中に見られる様々な植物は景観を構成する重要な要素の一つであり、それは地域の人々の生活や生産行為と密接にかかわりを持つ生き物である。生き物と人との関係性を理解する上で、Luisa Maffi 博士らのグループが1980年代後半に提唱した生物文化多様性の概念が欠かせない。生物文化多様性は、生物学的多様性、文化的多様性、言語の多様性の三つの多様性の元に成り立っていると言われている。里地のように人間の営みの中で形作られてきた景観では、単純にある場所に分布する生き物を生物分類学的、生態学的に記録、評価するのみだけでは不十分で、地域の人々の暮らしぶりや生き物の呼称も合わせて統合的に理解することで、それぞれの生き物がある場所に現在分布する背景をより深く理解することができる。生物文化多様性の視点は原生的な自然を除く広範囲の景観管理において重要である。世界の農業景観には、欧州のヘッジロウ、豪州のパドックツリー、東南アジアの産米林などの多様な形態の植物利用とそこから得られる様々な機能が知られるが、日本の境木についての研究は遅れてきた。

境木の利用背景を理解するため、茨城県、愛媛県肱川沿い、高知県仁淀川沿いの地域を対象に、境木の多様性、有用性、歴史性を地域比較した。各地方の代表的な境木は茨城県ではウツギ、カマツカ、愛媛県ではボケ、マサキ、コリヤナギ、高知県ではマサキ、イボタノキなど3地方間で樹種が異なり、さらに各地方内部でも集落間で異なる樹種を用いる地域性が見られた。境木の多目的利用にも地域性があり、例えば茨城のウツギは死装束の杖やオビシヤ行事に用いる弓、愛媛県ではクチナシを着色料、高知県ではウツギを葬儀の中で用いる孫杖の材料に用いられていた。愛媛県のコリヤナギや全地域のクワは近現代の工芸作物利用の衰退後に残されていた。境木の歴史性については、江戸時代の古文書にも現在も遺る境木の記述が散見される。これら事実からは境木は少なくとも近世以降、地域の習俗や産業の変化に応じて樹種を変化させながら今日に至っている



ことがわかる。

境木のある畑地景観を一例としたが、このような文化的景観を未来へ贈与するための先例として、明治期の廃仏毀釈と仏教建築の破壊の例を取り上げ、現在の国宝でさえも当時は解体の危機にあったこと、それが外部からの働きかけで回避され、今日まで保存されてきた実態を紹介した。文化を継承してきた担い手の価値観、集団心理、経済性の問題などが文化財の保護の成否に影響してきたと考えられる。各地の在来作物の保全、利用の取り組みや、世界各地の生物文化多様性保全の取り組みの知見を参考に、境木の残る農地景観も含めて、日本の文化的景観保全のために必要な視点や方策について考察した。

### 〔質疑の様子〕

一般的にはなじみのない境木についての講演だったため、果たしてどれだけの内容が参加者の皆さんに伝えられたのか不安だったが、質疑の時間にはさまざまな視点の質問があり驚いた。質疑では参加者の皆さん自身の経験や知識に基づいて、興味深い指摘が多くあり、私自身のこれまでの分析視点の問題や既往研究に対する理解が不十分だった部分にも多く気づかされた。例えば「文化が失われていくことにも合理性があるのでは?」、「言語と文化の多様性は区別されるべきものではないのでは?」、「文化が変化していくことと、それを保全することの折り合いをどのようにつけるのか?」といった指摘を受けたが、これらの他、いただいた多くのコメントは今後、私の研究活動や成果の普及発信に向けて新しい視点を与えてくれる貴重なものとなった。

### 〔講義後の雑感〕

質疑やミニレポートからは参加者の皆さんがそれぞれに関心を持って、身近な農地の草木の様子などを思い浮かべながら、境木や文化的景観とその贈与の問題について真剣に考察したことが強く伝わった。日本と海外でキノコの呼び名の多様性が違うという指摘や、世代で価値観が急速に変化していくことのある種の自然さについて、歌手のさだまさしさんの「前夜（桃花鳥）」の歌詞を引用してのコメントなど、学生の皆さんの教養の高さ、感性の豊かさにも驚かされた。今後、農業景観を訪れる機会があった時には境木を注意してみたい、というようなコメントも多くいただいた。今回の講演では、農村の緑地と人の関わりに興味を持ってほしい、という目標を持って臨んだが、その目標がある程度達成されたのかもしれない。今後も境木の研究を継続し、今回十分な説明ができなかった地域の多様性、有用性、そして近世以前の境木の歴史について、より深く探求、発信することで、境木の残る農業景観の魅力をより多くの人に伝え、その保全に貢献できるよう励んでいきたい。

— 2023年6月9日

## 歓待の罫と贈与のモラル： 中国農村の日常生活の場面から

江戸川大学社会学部

川瀬 由高／社会人類学・中国研究

贈与は、文化人類学では最も重要な研究テーマの一つである。そして、この学問の100年の歴史を振り返ってみても、マルセル・モースの『贈与論』（1925年）は、繰り返し言及されつづける古典の一つであった。近年では、モースの社会主義者／社会活動家としての側面に焦点をあてた研究や、「分配」「再分配」「負債」などをキーワードとした贈与論の再検討がなされるなど、新たな贈与論の読み直しが展開されつつある。本講義で焦点をあてた「歓待（hospitality）」もまた、そのような研究動向に位置づけられるものである。

今回の講義の前半では、モース「贈与論」の基礎知識の確認として、贈与・受領・返礼の「3つの義務」、および「市場交換と贈与交換」（人間関係の切断／構築）という考え方について解説するとともに、（マリノフスキーが知らしめた）トロブリアンド諸島のクラの事例と、（ボアズが知らしめた）北米先住民のポトラッチの事例について解説した。

続いて、近年の「歓待の人類学」の動向を、2012年の『Journal of the Royal Anthropological Institute』の特集、および2020年の『文化人類学』の特集を中心に確認した。「歓待の人類学」は、いわば贈与から歓待へと主語を入れ替えることで、人類学100年史を別様に捉えなおす試みである。その議論の起点となるのが、カントの平和論の批判から独自の議論を展開した、J・デリダの歓待論であった。(1) デリダによるホスピタリティ（hospitality）概念は、ゲストが「客」と「敵」の含意を有することを示したものであり、異人の両義性というテーマに通じる。(2) 同じく、彼の「無条件の歓待／条件付きの歓待」の概念は、「（純粹）贈与／（贈与）交換」の対比と重なる。歓待についての民族誌的探求は、返礼の不可避性というテーマと表裏一体である。

これらの理論的視点をふまえ、講義の後半では、現代中国の農村社会にみられる歓待、とりわけ、顔見知りのあいだでおこなわれる日常的な歓待（hosting）の事例を検討した。講師の調査村ではふだん、各家の門は開け放たれたままとされている。何の前触れもなく、勝手に扉を開けるなどして、時に友人が、時に親戚がそれぞれの家を訪れる。それは、何か用件を話すためであったり、ただの暇つぶしであったりするが、人々は、家主に勧められたイスに腰かけ、ひとしきり話をすると、すっと立ち去る。このような日常

生活の情景のなかで行われている、来訪者に対しイスを勧めるという行為やおすそ分けを与えるという行為の持つ意味について考察した。歓待は贈与と同じく、個人の自由意思を超えた社会的義務となっている側面がある。我々は身近な他者との関係づけにおいて、すでに「あるべき歓待」という罫にからめとられている。その結果、ホストにとって、突如として来訪する他者は喜ぶべき客人であると同時に略奪者（さまざまなモノをかすめ取っていく存在）となる。歓待とは、未だ訪れない者への身構えであり、「(「全き他者」) に対してのみならず) ごく身近な人間関係においてもみられるモラルでもある。

講義の終わりには、モースの社会主義思想、およびコロナ禍下に注目された利他性をめぐる一連の議論との関わりから、「他者のための空洞」というモラルの可能性について言及した。折しも入管難民法改正案が参院法務委員会で可決されたというニュースが報じられるなかでの講義であったこともあり、歓待という問題をより具体的に考えるきっかけになったのではないかという感触もあった。

質疑応答では、中国の調査事例に関する質問が数多くなされた。どの質問も具体的かつ的確で、受講生たちが中国人社会の対人関係の様子に興味をもって、またよく理解して聞いてくれていた様子が窺えた。

ミニレポートからも、受講生の理解の深さが窺えた。「受け取る義務」の不履行は人間関係の亀裂を招きかねないといったように、贈与論を身近な例にひきつけて考えることができたといった感想からは、本連続講義に資する情報の提供ができたことを感じた。また、歓待についての講義内容は、講師自身が研究している最中の内容で分かりにくい部分もあるかもしれないと断っていたものの、ミニレポートには講師の説明不足を補うような、非常に明晰なコメントが数多くみられた。「他者のための空洞」というフレーズを、混雑した電車において出入口に留まらないようにするふるまいを例に考えてみたものや、「余裕・ゆとり」という言葉に読み替えてその重要性を考えてみたもの、あるいは、「自分は飲食店にはいったときにお冷が出てくることを当たり前で求めている節がある」という自分自身の経験から、歓待においては受け手の内面にそれを求める気持ちが内在しているとする指摘などからは、講師自身、重要な示唆を得た。熱心に話をきいてくださり、ゲストとして講師を歓迎してくれた受講生のみなさんに、心から感謝申し上げます。

## 森林生態系における「贈与」： きのこ・植物・動物の相互作用

慶應義塾大学経済学部

糟谷 大河／菌学・系統分類学

菌類とは、きのこ、カビや酵母の仲間の総称である。シイタケやマツタケなどのきのこは、ミカンを放置すると生えてくるアオカビや、パンやワインの製造に関わる酵母などと同じ生物群に属している。カビや酵母ときのこが同じ仲間と言われても、ピンと来ないかもしれない。しかし、これらは体のつくりが共通しており、菌糸と呼ばれる糸状の組織からなっている。きのこを採ってよく観察すると、基部にカビのような菌糸が付着しているのが見られるが、この微小な菌糸こそが、きのこの本体である。

また、菌類のほとんどは孢子で増殖する。菌類の孢子は、被子植物や裸子植物の種子に相当するもので、カビもきのこも、孢子が発芽することで新たな個体が成長していく。自然界では、通常はきのこも菌糸の状態で存在するが、孢子をつくる段階になると、菌糸の一部が分化して、きのこ（子実体）を形成する。つまり、私たちが目にするきのこは孢子をつくるための器官であり、きのこは、被子植物でいえば花に相当するものである。

さらに菌類は、栄養の摂り方にも特徴がある。多くの植物は光合成を行い、自ら栄養分を生産する。また、動物は外界から食物を摂取して体内で消化し、栄養分を吸収する。一方、菌類の多くは体内から外界に酵素を出して、落葉や枯木などを体外で分解し、体内に栄養分を取り入れている。生態系において、植物は生産者、動物は消費者と呼ばれるが、菌類が分解者と呼ばれるのはこのためである。このように、体のつくりや栄養の摂り方などの点から、菌類は動物や植物とは異なった生物であるということが理解できる。

菌類は昆虫類に次いで多様な生物群であり、既知の菌類の種数は約10万種とされている。しかし、地球上にはさらに多くの未知の菌類が潜んでいるとされ、菌類の総種数は150万～990万種程度になるのではないかと推定されている。このように、菌類は巨大な分類群であり、顕微鏡で見なければ観察することが難しい微小なカビや酵母から、肉眼的にも識別できる大型のきのこ類まで、形態的にも多様性に富んでいる。今回の講義では、私たちの身近に存在しながらも、日常生活の中では注目されることの少ない菌類に注目し、森林における菌類の生き方やそれらの機能を概観することで、森林生態系における生物間の「贈与」について考察した。

落葉、枯木や土壤中、生きた植物の根圏や生葉の内部、動物の体表、体内や糞中など、森林の中で菌類はあらゆる場所に生存しており、動植物の遺体や老廃物（有機物）を分解して無機物に還元するという、物質循環の中で重要な役割を持っている。菌類により分解された森林内の老廃物は、窒素やリンなど、植物の生長に欠かせない無機養分となって環境中に還元され、それが植物に「贈与」されるという仕組みである。

森林内には、動植物と共生生活を営む菌類も多数存在する。特に、多くの植物と菌類は、菌根と呼ばれる構造を形成して共生関係を構築しており、森林生態系において菌類は不可欠の存在である。菌根とは菌類の菌糸が植物の根の表面を覆ったり、その内部に侵入したりして形成される構造の総称であり、その形態的・生態的特徴は多様である。菌根をつくることで、菌類は植物が光合成で生産した栄養分を受け取り、植物は菌が吸収した土壤中の水分や無機養分の一部を受け取る。このように、菌根をつくる菌類と植物は、双方がいずれも利益を受ける相利共生の状態にある。森林で生きる菌類と植物は、菌根を介して「贈与」の関係を構築しているのである。

一方で、菌類と植物は、互いに養分を「贈与」し合う関係から、時には植物が一方向的に菌類から「搾取」する関係へと移り変わることもある。森林内には、光合成をやめてしまった「菌従属栄養植物」と呼ばれる植物が存在する。ツツジ科の植物であるギンリョウソウがその代表である。菌従属栄養植物は、森林内のカビやきのこなどの菌類から栄養を横取りし、自らの栄養源としてしまう。つまり、これらは菌類を食べて生活している。これらの植物は、栄養をめぐる菌類とせめぎあいを起こしながら、多様な形態・生態に進化した。その結果、多くの菌従属栄養植物は光合成をやめ、緑色の葉を失った。地球上には880種ほどの菌従属栄養植物が分布すると考えられており、日本列島の森林にも多様な種が分布する。菌従属栄養植物は、菌類から栄養分を「搾取」して生存する方向に進化し、結果として光合成により自ら養分を生産することをやめたのである。

結びに、菌類と植物に加えて、動物が関与して森林内で構築される「贈与」の関係を取り上げる。ナガエノスギタケというきのこは、森林に生息するモグラなどの哺乳動物の排泄所（便所）に特異的に発生する。このため、このきのこは「モグラの雪隠茸」とも呼ばれ、森林内の地中につくられた、モグラなどの動物の排泄所を浄化している（＝便所掃除をしている）と考えられている。これらの動物の便所掃除をすることは、ナガエノスギタケにとっては栄養獲得という利点があり、一方の動物たちは、きのこに排泄物を掃除してもらうことで、清潔な環境に長期にわたって住み続けることができる。ここに、菌類と動物との、排泄物を介した「贈与」の関係を見ることができる。なお、ここには菌類と動物に加えて、植物も密接に関係している。ナガエノスギタケの発生源を調べてみると、動物の排泄所に樹木の根が繁茂する様子を観察することができる。ナガエノスギタケが動物の排泄物を分解することで生成された無機養分が、排泄所には豊富に存在するため、これを狙って樹木の根が繁茂する。このように、樹木もまた動物の排泄物を間接的に利用している。モグラなどの動物の排泄所では、動物、菌類、植物の三

者による「贈与」の関係が成り立っているのである。

以上のように、菌類は物質循環の基盤を支えるパイプ役となり、他の植物や動物に養分を「贈与」することで生態系に不可欠の存在となり、多様化を果たし、生き残ってきた。また、森林内には菌糸で媒介される2つの巨大な物質循環系がある。植物の光合成によって生産された有機物は、その2つの経路にそって循環、分解され、他の生物に「贈与」される。第1の物質循環系は、植物によって生じた有機物（木材・落葉・枝など）が菌類を軸に分解され、無機養分となって、新たに植物に「贈与」され循環するという経路である。第2の物質循環系は、菌根により、植物の光合成産物の数割が菌類に与えられ、菌により分解された後、再度、植物に「贈与」されるという経路である。

今回の講義を通じて、「贈与」を軸に、多様な生命の間で複雑な相互作用が成立し、生物の多様性が維持されているということを実感してもらえれば幸いである。なお、講義後の質疑応答やミニレポートでは、今回紹介したような生物間の「贈与」や「搾取」の関係をどのように捉え、解釈するか、示唆に富む多様な意見をいただいた。学生の皆さんには、質疑応答の場で活発に議論してくれたこと、ミニレポートにおいて自由闊達に意見を述べてくれたことを深く感謝したい。そして、今回、「生命の教養学」において講義の機会を与えてくださった、慶應義塾大学教養研究センターの関係者の皆さんに厚くお礼申し上げます。

## 生命の贈与：アステカ人の供犠のコスモロジー

神奈川大学外国語学部

岩崎 賢／ラテンアメリカ地域研究・宗教学

本講義では、16世紀のスペインによる征服時に、メソアメリカ（現在のメキシコやグアテマラなどがある地域）に巨大な王国を築き上げていたアステカ王国の、そのもっとも重要な宗教的儀礼の一つであった人身供犠（生贄の儀礼）と、その根底にある宇宙論・世界観について、図像史料や映像資料を用いながら解説を行った。

まず最初に、本講義「生命の教養学」における重要な問題提起、すなわち現代社会に広く蔓延する、利己主義と強い関連性を持つ行為である「交換」の原理と、見返りを求めない利他的行為としての「贈与」の原理という二つの原理に関して、簡単な解説を行った。それから本題に入り、メソアメリカという文化地域の地域区分や時代区分について概説した後、アステカ王国とはどのような王国であったか、そして、アステカの都・テノチティトランの中央神殿において、人身供犠はいかなる形式において実施されていたかの概要を示した。そして、従来のアステカの供犠に関する議論では、供犠の目的は、太陽や大地の神々に、神秘的な生命力を秘めた物質である人間の血液を捧げて、神々を活気づけることにあるとされてきたのに対し、講師（岩崎）は、アステカ人が描いた古代的図像の中には「人が神々に血を捧げる」という主題だけでなく、「神々が人に血を捧げる」という正反対の主題のものも少なからず存在することを示した。さらに、いくつかの古代的図像では、神々の血が人間世界に注ぎ込む様子を描いた図像が、図像全体として、あたかも一匹の巨大な生物のように描かれていることを指摘し、そのことからアステカの宇宙論においては、太陽や月や大地などの神々と、この地上世界の動植物は、全体として同じ血液＝生命的物質を分け合う一つの生き物として捉えられていたことを指摘した。このような宇宙論においては、神々であれ人間を含む動植物であれ、それらの間に血液がやりとりされることは、いわば生物の体内において血液が「循環」することと等しいことである。

以上のような内容の講義を終えた後、質問の時間に入った。何人かの学生が非常に熱心な様子で、中身のある質問をしてくれた。質問をしなかった学生の中にも、興味深そうに講義に耳を傾けてくれた者たちがいた。後に送っていただいた学生たちの「ミニレポート」を見る限り、学生たちは要点をしっかりと受け止めてくれたようである。概して、講師（私）にとって、とても手ごたえの感じられた講義であった。

●— 2023年6月30日

## チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』

東京大学大学院人文社会系研究科

新井 潤美／イギリス文学・比較文学

十九世紀イギリスの小説家チャールズ・ディケンズの小説『大いなる遺産』（1861年）を取り上げ、そこに描かれている「贈与」と「階級」のテーマについて、十九世紀イギリスの社会と文化という背景と共に考察した。講義ではまず「贈与」あるいは「遺産相続」というテーマが、イギリスの小説でどのように使われているかについて触れた。大きくわけて二通りの使われかたがある。第一はいわば結末近くの *deus ex machina* としてであり、主人公を窮地から救う、あるいは何らかのトラブルや問題を解決する手段としての「贈与」である。第二は、主人公やその他の登場人物の人生に多大な影響をもたらし、その運命を変えてしまう要素としての「贈与」であり、『大いなる遺産』における「贈与」はこれにあたる。十九世紀イギリスの社会においては、財産の贈与や相続は、たんに経済的な変化だけではなく、所属する階級の変化をも意味し、考え方や生き方、そしてアイデンティティにも大きな影響を与える要素となるのである。

講義ではまずディケンズの伝記的背景を簡単に説明し、彼がいわゆる「ロウワー・ミドル・クラス」と呼ばれる階級に属していたことについて触れた。ディケンズの作品の多くは雑誌に連載されており、「連載」という形態が作品の長さやプロットに影響を与えている。『大いなる遺産』もディケンズが自ら編集する雑誌に連載されており、当時も大きな人気を博したが、現在も何度も映画化やテレビドラマ化されている、ポピュラーな作品である。あらずじはワーキング・クラスの主人公ピップがある人物から財産を贈与され、そのお金で「紳士」になるよう指示されるというものである。その人物の正体は物語の終盤まで明かされない。この作品はヴィクトリア朝の社会における階級に関する認識を「贈与」をめぐるプロットを通して描いたものであり、ディケンズ自身の階級意識も表している。

実はイギリス文学が専門ではない学生たちに、文学作品の話をするのは久しぶりで、どれだけこちらが言いたいことが伝わるか不安に思っていた。しかし受講生は極めて熱心に話を聴いていただけでなく、イギリスの社会や階級制度、階級意識、そしてイングランド以外の地域についても活発に質問が上がった。講義の後に前に出てきて質問をする学生もいて、受講生の知識と知的好奇心には強い感銘を受けた。こちらにとっても大変刺激になる、良い経験をさせていただいた。



## 命の贈与 ——極北先住民イヌイットの狩猟と食物分配

国立民族学博物館・総合研究大学院大学  
岸上 伸啓／文化人類学・北方先住民文化研究

現世人類が地球上に出現したのは今からおよそ30万年前だと言われている。人類が農耕や牧畜を開始したのは約1万年前だとすると、人類の歴史の大半は狩猟採集民の歴史である。すなわち、狩猟採集民は、他の動植物から命をもらい、それによって生をつないできた。そして世界各地の多くの狩猟採集社会を見ると、狩猟や採集で獲得した食料は広く分配されていることが知られている。

北アメリカ極北地域をおもな生活領域としてきた先住民イヌイットは、クジラら動物は彼ら/彼女らのために命を差し出すと考えているため、狩猟とは動物からの命の贈与であると考えている。この講義では、イヌイットのグループであるアラスカ先住民のイヌピアットの捕鯨と鯨肉などの食物分配を事例として、人間と動物との関係を考える。

イヌピアットが捕鯨を開始したのは、今から3000年～2500年前と言われている。その後、紀元後1000年頃になると、ホッキョククジラの捕鯨はアラスカ沿岸地域の中心的な生業活動になり、捕鯨を基盤とするチュレ文化はグリーンランドまで100～200年の間に広がっていき、現在のカナダやグリーンランドのイヌイット文化の原形を形成した。アラスカ沿岸地域において捕鯨文化は存続したが、1848年から1914年頃にかけてヨーロッパやアメリカからやってきた鯨油の入手を第一目的にしていた商業捕鯨者が、ベーリング海からチュクチ海・ボーフォート海にかけての海域で捕鯨を行ったため、その生息頭数が激減した。その結果、1914年以降になるとアラスカ周辺海域での商業捕鯨は行われなくなった。

一方、イヌピアットやユピートらは1970年代には1971年の「アラスカ先住民諸権益処理法」の成立に伴い、民族意識が高揚するとともに捕鯨活動が以前に増して盛んになった。このことがホッキョククジラの過剰捕獲につながったために、国際捕鯨委員会(略称IWC)は1977年にアラスカ先住民に対して一時的な捕鯨の停止を命じた。米国政府とアラスカ・エスキモー捕鯨協会はIWCと交渉し、翌年から捕鯨を再開し、1980年代からアラスカの先住民は米国政府とホッキョククジラの共同管理を始めた。また、捕鯨自体もIWCの先住民生存捕鯨として1年間あたりの捕獲上限頭数が設定された。

21世紀に入ってもイヌピアットとユピートの11の先住民村で先住民生存捕鯨が実施されている。私の調査地ウットキアグヴィクでは、春と秋に地先をクジラが回遊する時に捕鯨を行っている。村には約50の捕鯨集団が存在し、それぞれは捕鯨に成功すると、祝宴・祝祭やドラムダンスなどを実施している。獲物の肉や脂皮、内臓は販売されることがなく、家族や親族、村人、友人らに分配されたり、贈与されたり、別の何かと交換されたりする。

調査地の村人の活動の1年は、捕鯨とその後の祝宴・祝祭を核とした生活サイクルによって特徴づけられる。捕獲されたクジラが解体されると、特定の部位の鯨肉や脂皮、内臓は、捕鯨を助けたグループ、クジラを解体場所まで曳航するのを助けたグループ、解体を助けたグループや村人にルールに従って特定の部位が分配される。捕鯨キャプテンが祝宴や分配のために貯蔵穴で保管する以外の鯨肉や脂皮は、捕鯨集団のメンバーに分配される。また、鯨肉等は、捕鯨キャプテン宅での共食会、アプガウティやナルカタークの捕鯨祭の共食会、キリスト教の感謝祭やクリスマスの共食会、使者祭の共食会などの時に分配が行われる。さらに、各捕鯨集団内での鯨肉等の分配が行われるのに加えて、捕鯨者から村内外の家族や親族、友人、知人に対しても分配が行われる。このように様々な機会に鯨肉等は分配されている。

アラスカのイヌピアットにとって捕鯨およびその後の分配は、文化的に価値の高い食料の獲得・流通・消費、社会関係の確認・維持、アイデンティティの確認・保持、クジラとの関係の維持などの効果・機能があるため、現在でも重要な社会的活動である。この捕鯨やその後の分配は、イヌピアットとホッキョククジラの特別な関係の上に成り立っている。前述の通り、彼ら/彼女らはホッキョククジラやアザラシら動物は人間のために命を差し出すと考えおり、クジラを怒らせたり、不快にさせたりすると、戻ってくれなくなる（不猟になる）と考えているので、ホッキョククジラに敬意を払い、粗末な取り扱いをしないし、クジラが嫌がる行為はしない。イヌピアットの捕鯨とその産物の分配は、命を提供するクジラ、命をつなぐ人間、クジラの靈魂をクジラの世界に送り返し、再生させる人間という循環的な関係の上に成り立っているのである。

反捕鯨のグローバルな動きが、「動物の権利」の考えを重視する欧米社会を中心に認められる。そしてこの半世紀のうちに、クジラは人間が利用する資源から保護の対象や環境保全のシンボルに変化してきた。しかし、この地球上には、今回の講義で紹介したようにクジラを捕獲することによって社会と文化を維持し、生活している人びともいる。グローバルな視点から見ると、クジラと人間の関係の変化から分かるように人間と動物との関係は大きく変わってきた。グローバル化した世界に生きる私たちは、「他の動物・生き物（生命）とどのような関係を形成しながら、生きていくべきだろうか?」。この課題を様々な事例を比較検討し、考えてもらいたいと言う問題提起で、本講義を締めくくった。

受講生からは、イヌピアットの捕鯨や食物分配について非常に質の高い、的を得た質問を受けた。今回の講義によって、自分たちの持つ見解や常識が、異なる社会や時代で

は、正しいとは限らないということを知り、身の回りの重要な問題について自省し、自らを相対化することの重要性を受講生には学んでいただきたいと考える。

慶應義塾大学教養研究センター

## 2023 年度「生命の教養学」講義記録

---

2024 年 1 月 31 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 片山杜秀

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL:045-566-1151

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2024 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。



Keio University

